

組織化される現実－超心理学からのマトリックス論

石川 幹人

『マトリックス』は見るものによって多様な解釈を許すような象徴的テーマに満ちあふれている。文化評論家のスラヴォイ・ジジエクは、それを「一種のロールシャッハ・テストのように機能する映画なのではないか」[1]という。特異能力(ルビ:サイキック)の科学的探究を目指す超心理学にとっても『マトリックス』は、深い示唆に富んだ作品と見ることができる。本稿では『マトリックス』を手がかりにして、現代超心理学の裏に潜む特異的世界観を示す[2]。

作品の中で、最初に明示的に特異的現象が出現したのは、預言者の部屋の待合室でネオが目にするスプーン曲げである。仏教徒の少年がネオに言う。「スプーンを曲げようとしちゃいけないんだ。そんなことはできない。真実に近づこうとするだけ。…スプーンはないんだ。そうすると、見えてくる。曲がるのはスプーンではなく、自分自身だって。」少年の言葉は、仏教の観念論的世界観を表わしていると同時に、超心理学者による現象的研究の報告とよく合致する。その研究報告によると、特異能力を持つとされる人々は、発揮時に「世界と自己との一体感」などを積極的に感じるという[3]。

ネオがスプーン曲げを目撃するのはマトリックスの内部の仮想現実においてであるが、二作目の『リローデッド』の終了間際には、現実世界でネオがセンチネルを特異能力で破壊するシーンが登場する。このシーンは意味深長であり、三作目の『レボリューションズ』での展開がどうなるのか、おのずと想像をかきたてる。現実世界と思っていたのが実は上位(ルビ:メタ)マトリックスの仮想世界であったとか、ネオが現実世界でも特異能力を発揮できるようになったとか、いくつかの可能なストーリーが思い浮かぶ。しかしウォシャウスキー兄弟は、ネオに現実世界における限定的な特異能力を授けることによって、『レボリューションズ』のクライマックスを盛りあげた。機械都市(ルビ:マシンシティ)に侵入するネオに備わった能力は、マトリックス内部の彼の能力と比較すると明らかに限定されていた。超心理学の言葉を使えば、超感覚的知覚(ルビ:ESP)は使えるが念力(ルビ:PK)は使えないのである。マトリックスの内部でネオは、雨のように飛来する弾丸を空中で止めたり、空をスーパーマンのように華麗に飛翔したりできた。これは念力である。ところが機械都市では、そのような芸当はなく、眼に傷を負ってもなお「心の眼」で外界を感知するとか、迫りくるセンチネルを破壊するとかのみが可能なのである。外界の感知は透視能力であり、ロボットの破壊は(念力と考えることも不可能ではないが)アクティブなテレパシーである。『マトリックス』に現われるロボットは感覚力を持つ存在であるからこそ、ネオのテレパシーを受けて自爆してしまうのである[4]。

現実世界と仮想世界とが交錯する『マトリックス』を鑑賞していると、観客自身が映画に引き込まれ、世界の現実性が揺らいでくる。あたかも二枚の鏡の間にはさまれて、監視人(ルビ:エージェント)スミスのように無限に複製された自分自身を見るかのようなのだ。ジジエクは次のようにいう[5]。

現代の経験は、繰り返し繰り返し、自分の現実感や通常のそれへの姿勢が象徴的虚構の上に成り立っていることに気づかざるをえない状況をつきつけてくる——何が通常の認められている真実かを決め、与えられた社会で意味の地平となるものを決める「大文字の<他者>」が、現実の中での科学的「知識」によって示されるような事実には根ざしていないということだ。

現代科学がまだ「主たる言説」にまで高まっていない伝統的な社会を考えてみよう。その象徴空間で、人が現代科学の命題を唱えようと、「狂人」扱いされてしまうだろう。肝心なところは、この人が「本当に狂っている」のではないだとか、彼をその立場に置くのは、狭い、無知な社会だけだとか言うだけでは足りないということだ。ある意味で、狂人扱いされ、社会の大文字の<

他者>から排除されることが、事実上、狂っていることに等しい(強調のルビ:、、、)のだ。

ジジエクは、『マトリックス』が現実の社会的な構成可能性を映し出している点を評価しているのである。現実には、「恣意的な規則に規制される仮想の領域」であるというのだ。そしてそれは、たんにわれわれの現実「把握」が社会的に構成されているということとどまらず、現実「世界」そのものが構成されている可能性に気づかせる。

現実が「構成された」システムであるとすれば、そこにはアノマリー(変則的事態)が必定である。機械システムに定期的なメンテナンスが必要であり、社会システムに時代に応じた立法が必要であるように、自然に発生するほころびは、システムを維持するために繕わねばならない。『レボリューションズ』における最終バトルがアノマリー同志の戦いであるのは示唆的である。赤い錠剤を飲んでマトリックスから覚めてしまったネオはマトリックスにとってアノマリーであり、異常監視人でありながら自ら異常増殖してしまったスミスもまたアノマリーである。マトリックスのアーキテクトは結局のところ、世界の歴史によく見られるように異端者同士を戦わせてシステムの安定化をはかったのである。戦いはどうやらネオの勝利に終わり、平和がもたらされるが、マトリックスの内部では依然として「偽りの幸福」が刻まれ続ける。

超心理学は、われわれの生きるこの世界でのアノマリーを研究対象とする。科学システムからはみ出した現象を見つけ出して「科学的に」究明するのだ。ところが、これを科学システムの側から見れば、超心理学は監視人の役割を果たしているのである。致命的なアノマリーをいち早く見だし、科学システムへと警告を発するセキュリティ機構なのだ。超心理学は「学」と名がつくものの、本流科学の一員として認められない代替科学(ルビ:オルタナティブ)とみなされている[6]。その理由は、アノマリーが拡大して收拾がつかない場合には、スミスのように分野ごとそっくり闇に葬られる可能性を担っているからである[7]。つまり超心理学は、科学システムの周縁に位置し、科学を批判しながらも科学を支えるという、両義的な役割を負わされているのである。

超心理学はこれまで、数々のアノマリーを蓄積してきた。そして最近では、アノマリーも洗練化され、一部は体系化もされてきている。それらのアノマリーがあぶり出す特異的世界観は、マトリックスの世界を彷彿させる。つまり、先に述べたように、われわれの現実感が社会的に構成されていると同様に、物理的現実世界が何らかのかたちで巧妙に組織化されているのではないかと見えてくるのである。そしてこの現実世界の組織化には、われわれが心的世界とみなすものの少なくとも一部がかかわっているようである。なぜなら、超心理学者の研究がことごとく誤りやでっちあげだというのでもなければ、われわれが心に抱くことが現実世界へと積極的に関与するとみなさねばならない。古くは、「超能力」という言葉に示されるように、念力などが存在すれば、それは通常的能力を超えた「高級な力」と考えるむきがあった。ところが、その組織化される世界という世界観においては、超能力は物理的現実世界のほころびであり、現実世界の安定化をはかるために封じ込められるべきものとなる。その一方で、現実世界を組織化し安定化する原理は、超能力とも通底する心的世界の作用であるのかもしれない。結果として科学は、客観的事実を知識体系として記述する営みではなく、体系的に記述することによって現象を客観的事実へと固定化する「装置」であると考えられる。

現代の超心理学がつきつけている、こうした特異的世界観を読者による考察の土俵に載せるために、以下では超心理学の研究成果の一端を紹介する。はじめに特異現象が社会の辺境で起きる傾向性を示した「隠蔽効果」を、次に微小な特異現象を実験的に厳密にとらえた「乱数発生器実験」を、最後に人間の集合的意識の同調性をとらえる「地球意識プロジェクト」を解説する。

○隠蔽効果

特異現象は厳密な実験を行なうと姿を消してしまう、と超心理学者は指摘する。特異現象には「とらえにくさ」という性質が伴っているように見える。これは懐疑論者から見れば、トリックが行なえない状況になって「姿を消した」に過ぎず、まさに「インチキの証し」である。だが、もし特異現象が存在するのならば、その現象が自らを隠蔽するような性質を結果的に示しているのは、ほとんど

ど確実である[8]。

ケネス・パチェルダーは、長らく「会席者グループ」の研究を続けていた。会席者グループとは、複数の参加者を部屋に集め、交霊会に似た状況設定で特異現象が起きよう促すものである。その過程で念動などの現象が参加者に混乱を与え、さまざまな心理的防衛反応を引出すこと、またそれによって、さらなる現象が起きにくくなることを報告している。一九七〇年頃、彼は、その現象に対する防衛反応に、「保有抵抗」と「目撃抑制」とがあると指摘した。前者は、自分が特異能力を持つこと、あるいは持っていることが知られることへの心理的抵抗であり、後者は、現象を目撃したという経験を否定しようとする傾向、あるいは目撃をしないようにする傾向である。どちらも、未知のものや制御できないものへの恐怖に起因するという。この理論によれば、特異現象はこうした恐怖を最小化することで現われやすくなる。たとえば、能力を発揮したり、現象を目撃したりしても重大なことではないという気楽な雰囲気、部屋の中に形成するとよい。

チャールズ・タートは一九八二年、周囲の人間の考えていることや感じていることがわかるという能力を保有した状況、あるいは、周囲にあるものを手を使わずとも自由に動かせるという能力を保有した状況を想像させると、被験者が多くの恐怖と、保有抵抗とを報告することを確認した。超心理学者でさえも、こうした潜在的恐怖に気づかずにいるという。特異能力の無制限な発揮は、自他の幻想を打ち砕き、自分と他者という社会制度上の基礎を失わせる。そうしたものに対する恐怖は、死に対する恐怖に近いものがあるだろう。その結果、能力は存在しないものとして、あるいは特殊な場面にしか起きない形に抑制されてしまう。特異現象の研究に携わる者は、そうした恐怖を克服せねばならない。パチェルダーのいうような一時的な回避だけでは十分でない。まず恐怖があることを是認し、その否定的側面を受入れて人格的成長をとげる中で、恐怖に対処可能となることが理想である、とタートは語る。

一九七八年にジョン・ランドールは、念力を発揮する被験者にカメラを向けたり、電子機器で測定したりしていると現象が出にくいことを指摘し、特異現象の「逃避性」と表現した。また機器が停止しているときに限って、念力現象が現われる傾向もある。ランドールは、人間の恐怖によって現象が抑圧されたとするよりも、現象自体が能動的に逃げるのだと比喩的に語る。名の知れた能力者について逃避性現象が起きるとすると、そう考えた方が合点がいくのだ。名の知れた能力者は、能力を保持していると公言したうえで、それを発揮するように努力しているので「保有抵抗」はかなり小さいと考えられる。実験者による「目撃抑制」も、実験機器が停止しているときには目撃しているので、実験機器が動作しているときに限って抑制が働くと考えるのは、少々無理がある。特異能力の抑圧の原因が、被験者の個人的恐怖でも、実験者の個人的恐怖でもないとする、コミュニティ全体の集合的恐怖に起因するのだろうか。実験機器に証拠を残すということは、そうした集合的恐怖に抵触するとも考えられる。

ブロードは一九八五年、「特異的現象の事実性の証明や解明や再現性が一貫して、またおそらくは積極的に不明瞭化されている」のではないかと指摘している。そのうえで、その性質を逆手にとって、実験を成功に導く戦略を提唱している。また、特異現象の抑圧が社会的要因で起きるとすると、現象の現われ方と、社会の文化的側面(それをいかに許容しているか)との間には、深い関連が見られると予想できる。ジェームス・マクレノン、こうした観点からの社会学的研究に大きな成果が期待できると主張している[9]。

○乱数発生器実験

量子的過程には全く予想できない現象(これは、人間の知恵が足りないからではなく、「原理的に」予測できない)があり、超心理実験への利用が古くから模索されていた。すでにペロフらは一九六一年に、放射線を検出するガイガーカウンターを使った念力実験を行っていたが、物理学者のヘルムート・シュミットは一九六九年、ストロンチウム九〇の放射線(ベータ崩壊によるベータ粒子の放出)を使った乱数発生器を作成して実験に利用した。この乱数発生器では、ベータ粒子をガイガーカウンターが検出すると、規則正しく高速に変化しているカウンターの値がその時点で記録されるようになっている。ベータ崩壊のタイミングは予想できないので、純粋な乱数が発生で

きる。乱数に対し、特定の乱数が出るように念をかけると念力実験になるのである。放射線を使った乱数発生器は取扱いが難しいので、後にシュミットは、ベータ粒子の検出に代えて、ツェナーダイオードの電子雑音(量子的現象)の検出に基づく乱数発生器を作成した[10]。今日、このタイプの乱数発生器が、超心理実験に限らず、モンテカルロ・シミュレーションや暗号通信などに世界中で多数使用されている。図1は、アムステルダム大学で設計され、オランダのオリオン社が販売している乱数発生器である。

一九八〇年代には、乱数発生器を作成して大規模に実験をする研究者が次々に現われた。なかでも代表的なのは、プリンストン大学工学部のロバート・ジャンらが行なったものである[11]。彼らは、大勢の協力者を被験者に使って、多数回の乱数発生器実験を、一二年間にわたって積み重ねた。彼らは一秒間に一〇〇～一〇〇〇個の二値乱数を発生する高速乱数発生器を用いて、乱数の累積値をプラスに偏らせる、マイナスに偏らせる、何もしないという三つの条件で念力実験を行なった。ジャンらは七八〇〇万回の念力試行全体で、五〇.〇二%のヒットを得て、p値は〇.〇〇〇三で有意であった。

乱数発生器実験全体の総合(ルビ:メタ)分析は、ラディンとネルソンによって、一九八九年および二〇〇〇年に発表された[12]。一九五九年から二〇〇〇年までの二一五の報告(九一の異なる研究者による五一五の実験)に渡って分析したところ、p値にして一〇の五〇乗分の一の高度な有意性となった。これらの実験が、不成功に終わった実験が報告されずに隠されていることで有意になっているにすぎない(引出し効果)と仮定すると、報告されない五二四〇の実験が存在したことになる。これは、研究者と実験設備の数からして現実離れた数字である。

またラディンとネルソンは、懐疑論者が指摘するような実験上の欠陥を一六箇所あげ、実験がもつ欠陥の数と実験結果の有意性との相関を調べたが、無相関であることがわかった。懐疑論者は、実験上の欠陥がゆえに有意な結果が出ていると批判するが、そういった欠陥を取り除いた最近の実験でも、同じように有意な結果が得られているし、過去の実験であっても、欠陥があるからといって有意な結果になっているわけではないことが示された。

○地球意識プロジェクト

奇妙なことに、乱数発生器を放置しておく、出力の偏りが得られることがある。その偏りはときに、周囲にいる人間の集合的意識の変化を反映すると意味づけられ、全世界的な実験プロジェクトに発展している。

先に述べたプリンストン大学のプロジェクトでは、乱数発生器を連続的に動作させ、それに念力を働かせる実験を繰り返していた。乱数発生器実験の中には、被験者が念力の発揮を特段強く意識せずとも、一定の乱数発生器の偏りを生むこともある。パーマーとクレイマーの一九八四年の実験では、被験者に二分半の間乱数発生器に対してPKをかけさせ、続く二分半の間休憩させていた。被験者は、その休憩時間も乱数発生器を測定していたことは知らなかったのにもかかわらず、休憩時間の乱数発生器出力のみが有意に大きな偏りを示した。こうした被験者が念じた作用が念じた後も続く効果は、「遅延効果」として知られている。

もともとベル研究所の技術者であったディーン・ラディンは、そうした乱数発生器への無意識的影響に注目し、フィールド乱数発生器実験を行なった。彼は一九九五年、人々が集まって瞑想を实践するワークショップの場に、乱数発生器付きのポータブル・コンピュータを持ち込んで、自動記録させた。人々が無意識のうちに乱数発生器に影響を与えるのではないかというのだ。結果は、ワークショップ開催中に大きな偏りが得られ、終了後には消失した。p値にして千分の一であった。彼はさらに、ラスベガスのコメディショーに乱数発生器を持ち込んだり、テレビでアカデミー賞の授与式やスーパーボールが放映されているときに乱数発生器測定を行なったりしたところ、総じて人々が陽気に騒いでいるときに、乱数発生器の偏りが大きくなる結果を得た[13]。

何かイベントがあると、そのフィールド乱数に偏りが生じるのなら、それを地球規模で行なったらどうであろうか。そうした発想でラディンらが始めたのが、地球意識プロジェクトである。地球意識プロジェクトは、世界各地に乱数発生器を設置して乱数を記録し、その偏りと地球規模の出来

事との対応関係を見ようというものである。プロジェクトリーダーは、プリンストン大学工学部変則工学研究所のロジャー・ネルソン教授である。乱数発生器を設置したサイトでは、毎秒二百ビットの乱数発生器の出力を記録し、自動的にプリンストン大学へデータを送付する。プリンストン大学では収集されたデータを随時公開し、誰でもが解析できるようになっている[14]。

プロジェクトが本格的にスタートしたのは一九九九年であり、以来、サイトも次第に全世界に広がって、今や七〇か所以上になっている[15]。これまでも、オリンピックやニューイヤーなどの世界的なイベントがあると、たびたび乱数が偏るといふ観測結果が報告されている。なかでも二〇〇一年九月十一日のテロ事件の日には、極端な同調的変動が観測された。その累積変動はテロの時刻から極端にプラス方向に振れたうえに、全乱数発生器の変動の相関が一年中でその日をもっとも高かった(図2を参照)。このデータ分析は五人の統計学者によって独立に、そして多角的に解析され、一致して九月十一日の特異性が結論づけられている[16]。

乱数発生器の地球規模の偏りが見られるとしても、それがどのようなメカニズムで起きるかについては、これまでのところ具体的な仮説は立てられていない。詩的な表現を好む人は、「地球(ルビ:ガイア)の息吹」が偏りとして現われるのだという。それにちなんで乱数発生器の全地球的記録は「電子ガイアグラム」と呼ばれている。

*

去る十一月五日には、『レボリューションズ』が全世界三十カ国以上で同時公開された。それも最初の上映時刻も同時刻にするという念の入れようであった。時差の関係で夜十一時に開演となった日本の映画館の観客は、見終わると終電もなくなった真夜中の街を放浪して余韻に浸るというおまけつきだった。それでも、メディア戦略が効を奏したせいか、かなりの観客動員があったようである。そのとき、同時に全世界では、きっと数万人もの人々がザイオンの戦闘シーンに、ことによるとミフネ隊長の勇ましさに心を動かされたにちがいない。電子ガイアグラムには、そのゆらぎが記録されたであろうか(現在分析中である)。

科学システムは、今後も顕在化したアノマリーを排斥し続けるだろうか、それともアノマリーを呑みこんで新たな安定点を模索するだろうか。科学もわれわれの営みのみだから、われわれ自身がその選択を迫られているのだ——さあ、どちらの色の錠剤を飲むでしょうか。

注

- [1] ウィリアム・アーウィン編著『マトリックスの哲学』(松浦俊輔・小野木明恵訳、白夜書房)の第二〇章所収「マトリックス、あるいは倒錯の二面」(邦訳書三一二頁)による。
- [2] 筆者は、明治大学においてメタ超心理学研究室を開設して、超心理学の哲学的・社会学的研究を行なっている。詳しくは次のホームページを参照されたい。
<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~metapsi/>
- [3] たとえば、臨床家のパメラ・ヒースは、一九九九年の超心理学協会(Parapsychology Association)の大会報告で、念力をたびたび経験するという人々の内観報告を集め、念力発揮時には、自己や自我の観念が希薄になっており、何が起きるかをすでに「知っている」のような感覚を持つ傾向が高いと述べている。また、暗黙的な意図のもとに対象から注意をそらすことが重要としている。ただし、特異能力者とされる人々がおしなべて東洋的世界観などの、特定の考え方に好感を持っているという可能性もあるので、注意を要する。
- [4] 超心理学では、ゾウリムシなどの生体に特異的な影響を与え行動を変化させる実験がたびたび行なわれている。その実験では、スプーン曲げなどの念力実験よりも現象が顕著にとらえられ、念力とは異なった生体へのテレパシーによる積極的な働きかけである可能性が指摘される。超心理学者のレックス・スタンフォードは、その現象をMOBIA(送り手による精神・行動面への影響)と名づけ、独自のカテゴリーを与えている。
- [5] 前掲邦訳書三二二～三頁。

- [6] 代表的なウェブディレクトリのヤフーでは、「自然科学と技術」の下位項目の「オルタナティブ」(<http://dir.yahoo.co.jp/Science/Alternative/>)に「超心理学」が分類されており、グーグルのディレクトリ(<http://directory.google.com/Top/World/Japanese/>)では、「科学」の下位項目の「オルタナティブ科学」に「超心理学」が分類されている。両者とも該当分類中には、「超心理学」のほか「学」のついた項目は存在しない。
- [7] このあたりの超心理学者と懐疑論者の論争は、笠原敏雄編著訳『サイの戦場』(平凡社、一九八七年)にまとめられている。
- [8] 超心理学の理論は、この「隠蔽効果」を説明する内容を含むことが必要である。笠原は、この点に注目して文献を収集し、笠原敏雄編著訳『超常現象のとらえにくさ』(春秋社、一九九三年)を出版した。この節の記述は、この文献を参考にしている。
- [9] James McClenon, Wondrous Events, University of Pennsylvania Press, 1994
- [10] シュミットは乱数発生器を、特異的現象の存在を証明する厳格な実験設定に利用した。その一連の実験では、部外者(ときには現象の存在に懐疑的な人物)に実験監視者になってもらい、次の仕事をお願いするのである。実験者は、乱数発生器によってあらかじめ発生した乱数系列のプリントアウトをコピーして、(本人を含めて)誰も見ないように封をしたまま実験監視者に送る。実験監視者はその封筒を受け取ったら、実験を構成する複数のセッションごとに、どの乱数をターゲットにするかを、それぞれ無作為に指定し、実験者に伝える(封筒は開封せずに厳重に管理する)。実験者は、その指定されたターゲットに応じた念力実験(これは過去遡及的念力と言って、すでに記録されている乱数を念力によって変化させるという設定で行なう)を被験者に対して行なう。実験結果が集計されたら(この時点で念力が働いたかどうか分かる)、実験監視者に結果を送付する。実験監視者は、事前に受け取っていた封筒を開封し、事前に決まっていた乱数によって実験が行なわれていたことを確かめる。シュミットは、この種の実験を一九八六年から一九九三年にわたって五回行ない、その結果を総計すると、 $Z=3.67$ (p 値にして約八〇〇〇分の一)で極めて有意になることを示した。実験監視者が信用のおける人物であれば、この種の実験は極めて厳格に特異的現象の存在を示すことになる。(『Journal of Parapsychology』第五七号、一九九三年、三五一～三七二頁)
- [11] ジャンほか著『実在の境界領域』(笠原敏雄訳、技術出版、一九九二年、原著一九八七年)に詳述されている。
- [12] 特異現象の存在証明を論じる一九八九年の論文は、基礎物理学分野の論文誌『Foundation of Physics』(第一九巻、一四九九～一五一四頁)に掲載された。二〇〇〇年の論文は、その後の研究を追加したものであり、次のURLから入手できる。
<http://www.boundaryinstitute.org/articles/rngma.pdf>
- [13] Dean Radin, The Conscious Universe, HarperEdge, 1997
- [14] 地球意識プロジェクトの全情報は、そのWEBサイト(<http://noosphere.princeton.edu/>)から入手可能である。URLに含まれる「ノウアスフィア」という用語は、ティヤール・ド・シャルダンが広めた「人間が将来至るであろう純粋な精神圏」を意味するものである。
- [15] 明治大学では情報科学センターにおいて、二〇〇二年一月より地球意識プロジェクトに協力し、乱数発生器サイトを運営している。現在のところ、日本で唯一のサイトである。なお、明治大学やその構成メンバーが、得られた乱数発生器データの内容を保証することはないし、この協力によって乱数発生器データの解析結果に基づく何らかの主張を支持することもない。
- [16] ネルソンによる論文報告が、『Journal of Scientific Exploration』(第一六巻、五四九～五七〇頁)に掲載されている。

図1. コンピュータに接続してデータ収集中の乱数発生器、
(a) 明治大学での使用例、(b) その拡大図

図1(a)



図1(b)



図2. テロ事件日の全乱数発生器の累積変動を、前後の 60 日と比較したグラフ。
テロの当日にかなり特異的変動を起こしているのがわかる。
(地球意識プロジェクトのサイトより許可を得て転載)

図2

